

---

# 愛し愛され、救われて。

てんのすけ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛し愛され、救われて。

### 【Nコード】

N5034T

### 【作者名】

てんのすけ

### 【あらすじ】

進学した学校に嫌気が差していた主人公。唯一の救いは、優しい保健の先生だけだった。

## (前書き)

よろしく願います。

なんか知らんけど今、ものすごい楽しい。

今までは学校に行くのがとても憂鬱だったのに、今はそんなことが全然ない。

どうしてなのか、そう考えると思い当たるのは一つしかない。

俺は恋をしてる。

自分でもバカだなあって思うくらいまっすぐな気持ちだ。

どうしようもなく、彼女のことばかり考えている。

そして、考えても考えてもどうしようもないから、彼女がいる学校に行く。

彼女の姿を見ると、胸が高鳴る。

彼女の声を聞くと、自然と微笑んでしまう。

彼女に微笑みかけられると、彼女の持つ優しさに包まれたような気がして、ものすごく安心する。

もう、アホみたいに彼女に夢中だ。

だから俺は今日も、彼女の姿を見るために薄いドアを開けた。

「先生、いる？」

「どうしたの、恭也。具合が悪いのかな？」

先生はいつものように文庫本を読みながら、微笑んでくれた。いつもいつも文庫本を読んでいる先生。いつ仕事をするんだろう。

「今日も先生に会いに来た。ヒマなら相手してよ？」

俺はいつも座る席に腰を下ろした。

先生が座る席の向かい側の席。そこが俺の定位置だ。

「会いに来てくれるのは嬉しいんだけどね、お友達とは大丈夫なの？」

先生は苦笑しながら、俺に聞いてくる。

「大丈夫。それなりにやってるから。やっぱり迷惑なの？ 先生は？」

そうだったら会いに来るのは控えよう、それなりに。

「ううん。元気になった恭也が今でも会いに来てくれるのはすごく嬉しい」

先生が微笑みながらそう言ってくれたので、俺はホッと胸をなでおろした。

だって、迷惑に思われてたらきつと、俺の気持ちは未来永劫届くことはないから。

「だったら、いいじゃん。俺、先生のそば、スゲー好きなんだ。だからさ、いさせてよ。なるべくさ？」

俺は途中から小さい声になってしまった。

恥ずかしかった。

好きな人の前で、意味が違っても『好き』って言うのは恥ずかしい。

恥ずかしさのあまり突っ伏した俺を、先生はクスッと笑って頭をなでた。

「恭也、なんて言ったの？」

突っ伏しながら横目がちに先生の顔を盗み見る。

思いつきりニヤついていた。

先生は絶対分かってる。なんだよ、あんなに恥ずかしかったのに……。

「教えない」

俺は再び突っ伏して、顔を見せないように隠した。

俺が顔を隠すと、先生は椅子を立ったようだった。先生が座っていたパイプ椅子から立ち上がったときに聞こえてくる、ギシツという独特の音が鳴ったからだ。

そして、先生は俺の近くに來たようだ。

先生の柔らかい香りが俺の近くで感じられたから。

「……！」

そして、先生は俺の耳にふっと、息を吹きかけてきたのだ。

俺はびっくりして先生のほうを振り向いた。

「何すんのさ」

「恭也は可愛いね。ホント、そんな可愛い顔をするからだよ？　こんなに苛めなくなるのは」

先生はクスクス笑いながら俺の頬に触れた。

「なんで、可愛いと苛めるんだよ。優しくしろよ、先生」

俺はほんの少しだけ、意地悪な先生にいらつとしたから睨んでやった。

すると先生はさらに笑みを深くした。

「優しくされたかったら、まず、その苛めなくなる可愛い顔をやめなさい？」

先生は俺の顎をクイッと上げて自分の唇と俺の唇を重ねた。

ああ、なんでこの人のキスは強引なのに、こんなにも優しいんだ……。

俺は目を閉じながら、先生の唇越しに伝わってくる優しさに身を委ねた。

俺、千歳恭也が先生に身も心もぞっこんになったのは、先生に助けられた事がきっかけだと俺自身は思っている。

俺が通う学校は、世間で言う進学校というやつで、成績のいいやつが絶対というところだった。

きっと、他の学校はそうでもないのだろうが、俺の入学した学校は生徒同士を競争させることで育てていく、という色が強く、テストの結果は小テストだろうが大手予備校主催の模試だろうが、全て張り出され、順位によってクラスが分けられたりする。

自分の実力以上の学校にまぐれで入学してしまった俺は、最初のテストで当然のように低い順位を叩き出し、すぐに落ちこぼれの烙印を押された。

最悪なのは、俺の席の隣には必ず成績優秀なやつがやってくるとだった。

成績が低いやつは、いいやつにサポートしてもらえ、ということなのだろうが、俺の場合はまるで違ったのだ。

小テストのたびに俺の答案を見てバカにしたように笑う顔、調子が悪く思つように点数が伸びない時は俺に点数を聞いて、一喜一憂する。

そんな扱いの俺だから当然の如く仲間外れにされ、会話には入れてもらえないし、それをどうにかしようと努力をしてもイマイチ結果に現れてこない。

またそれをどうにかしようと毎日、毎日寝る間も惜しんで勉強した。

それでも、全く彼らには追いつけない。

俺の中で、ドンドンとす黒い塊がどんどんたまっていた。

そんな俺にトドメを刺したのは期末考査の結果発表だった。

勉強すればするほど俺の成績は下がりまくり、ついには最下位になった。

掲示板を見て俺は愕然とした。

どうしてだよ、どうして俺はこんなにできないんだ。

なんで思つようになるねえんだよ！！

激情に任せて、掲示板に思い切り拳を叩きつけた。

掲示板は拳の形にへこみ、あまりの痛みに拳を見ると赤く血が滲んでいた。

「あーあ。派手にやつちやったねえ。大丈夫？ おてて」

突然の軽すぎる声だった。俺は殺意に近い感情を抱きながらも振り返った。

そこには、よく生徒の会話の中で出てくる美人で人気な保健の先生が立っていた。

「……………何ですか？」

一応、年上なので敬語の俺。

「ああ、もうっ！ 固いなあ！ 言わなかったっけ？ 私にはため口でよろしくっつてさ！」

んなこと知らねえよ。初めて聞いたつつーの、そんな話。

「はあ……」

とりあえず相槌を打った俺に、先生は口はニコニコしながらも目が笑って無い状態で詰め寄ってきた。

「ああ、うざいったらないわね。ほら、こっちなさい。その血だらけの手、何とかしなきゃダメでしょう？」

気がつく俺の手は先ほどの掲示板へのパンチで血だらけになっていた。俺の制服の裾を握ってずんずんと前に歩いていく先生。俺はされるがままだった。

保健室につくと、先生は俺の手当てを手際よく始めた。

「……手際、いいんですね」

俺は聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「当り前でしよう、保健室の先生よ、私」

先生は何言ってたんだ、コイツと言わんばかりに怪訝そうな表情で俺を見た。

俺は目線をそらし、されるがままに手当てを受けた。

それにしても、この先生は本当に保健室の先生なのか？

学生気分丸出しなギャルっぽい服装の上に白衣を羽織っているだけの恰好。

どう見てもコスプレ趣味のギャルにしか見えない。先生なんだし、もつと落ち着いた服装をするべきじゃないのか？

「保健室の先生に見えない、そう思ってたんの？」

「……！」

「ああ、凶星？ 先生、ちよろつと勘がいいのよね。でも私はそれでいいと思うわ。保健室の先生に見えなくてもね。服装とか実績とかじゃないでしょう？ 大事なのはさ。保健の先生としての意識、行動、職務を全うできれば十分じゃない」

先生は俺の手当てを終え、備え付けの冷蔵庫から麦茶を取り出し、

コップに注いで渡してきた。

「はい。だから、あなたも成績がどんなに悪くてもいいと思うのよね。学生の本分はなにも勉強だけってわけじゃないし。学生時代という短い期間でしか学べないことってたくさんあるから。それに世間一般で言われてる勉強ってやつも順位のためじゃなくて、自分を高めるためにするものでしょう?」

先生があまりにも簡単に言うから、俺は麦茶を机に力強く置いて怒鳴った。

「簡単に言うなよ! この学校は成績が全てなんだよ! だから、俺は成績が悪いから弾かれまくりだよ! アンタは人気があるから一人じゃないもんな?俺はずっと一人だよ! この気持ち、アンタには分かるのかよ!」

先生はにっこりと俺に微笑みかけると近づいてきて、ふわりと俺を優しく抱きしめた。

「それがあなたの本音なの? あなたはさみしかったの?」

俺は突然のことに驚いて動けなかった。

「気付いてあげられなくてごめんね。もう、大丈夫よ。私がいるから」

先生の声はとても優しくて、どうしようもなく俺に響いてきた。

俺は学校（こ）にいて、こんなに優しい言葉をかけられたことが一度もなかった。

「なんだよ、それ」

なんで、アンタはそんなに優しい言葉をかけてくれるんだ。

「私、いつもここににいるから。だから、来なさい。恭也」

なんで俺の名前を知っていたのか、どうして声に懐かしさを感じたのかなんかどうでもよかった。

今は、彼女の優しさが俺の中に染みわたった。

それからというものの、俺は先生に保健室までよく会いに行った。先生は俺に麦茶を出して、他愛のない話に付き合ってくれる。

それが日常になりつつあったある日、俺は気付いた。

俺、最近楽しいよな。

どんなに見下されても、どんなに結果が出なくても、先生と話せばすっきりするし、幸せな気持ちになれた。

先生に会いに行くために学校に俺は行っているのかもしれない、そう気付いた時だった。

俺がいつものように保健室に行くと、先生は他の生徒と話をしていた。

確か、アイツは成績もよくて顔もイイという評判のやつじゃなかったっけ？

そいつは親しげに先生と話していて、時折先生の髪や肩になれなれしく触れていた。

俺はそいつが先生に触れるたび、言いよのない怒りに支配された。

どうしてこんなにもムカつく？

俺はそいつがいるにも関わらず、ドアを開けた。

「先生、腹、痛いんだけど」

「あ、恭也じゃん。どうした、腹痛とかウソだろ」

「ウソじゃないから。いいから、先生、面倒見てよ」

自分でも引いてしまうくらいの態度だった。それでも先生はしょうがないなあ、と軽く息を吐いて俺の方へ来た。

「ちょ、お前何言ってるの？ キチガイってやつ？ どこまでもバカなやつだよな、お前ってさ」

イケメン野郎は俺にバカにしたような視線を送ってくる。口元が嫌な感じに歪んでいるのがどうしようもなく腹立たしい。

「坂本君。そんな人を貶めるようなこと言う人、私嫌いかも」

「え、ちょ、先生！？」

「とりま、病人来ちゃったからさ、早いトコ出てつてくれる？」  
先生はニコニコと笑顔を絶やさずにイケメン野郎を保健室の外まで押し出した。

ドア越しになにかイケメン野郎が嫌みったらしくほざいていたが関係ない。

先生は俺のことを優先したんだから。

しばらくして、俺と先生は二人きりになった。

「どうしたの？ 本当は」

一応、腹痛ということで貫き通した俺はベッドで寝ていた。

「先生、俺、おかしいのかもしれない」

「どこが？」

「俺、先生がさっきの野郎と話してるのを見て、ものすごく頭にきたんだ。どうしようもなくてさ、胸が痛くなつてさ、俺……」

俺が言い終わる前に、先生は俺の唇に自分の唇を重ねてきた。

「せん、せい？」

突然のキスに驚きを隠せなかった。

「どう？ 治った？ 胸、痛かったんでしょ？」

先生は笑顔で俺に言った。少し赤みががったその笑顔はとても魅力的だった。

「まだ、痛い、かも」

俺は胸の痛み、よりもまたしたいという欲求の方が強かった。そして、俺がそう言えば先生はキスしてくれると思った。

だって、先生は保健室の先生だから。

生徒の苦しみを取り除くのが仕事だから。

先生はしかたないなあ、という感じで苦笑すると、俺に再び唇を重ねた。

先生と出会って初めての夏のことだった。

俺はクラスで信じられないことを聞いた。

「保健室の香田先生が今期で退職することになった」

ホームルームで未だに名前すら覚えていない担任がそう、言ったのだ。

俺は愕然とした。

先生がいなくなるって、どういことだよ……！

いつもここにいるからって、言ってくれたじゃないか。

俺は、先生に話を聞くためにホームルームが終わってからすぐ、保健室に走った。

先生はいつもと変わらずにギャルっぽい格好に白衣を羽織って、文庫本を読んでいた。

「どういことだよ」

「聞いちゃったんだあ」

俺の第一声を予想していたかのように余裕を持って答える先生。

それと正反対に余裕がない俺は声が大きくなる。

「どうしてだよ！ どうして先生、やめちゃうんだよ！」

俺の言葉に先生は冷たく言った。

「それはなんであなたに言わなくちゃいけないの？ あなたに関係ないでしょう？」

「そ、それは」

確かに俺には関係ない。俺は先生とは生徒と教師という立場ではないのだから。

恋人とか、そんな甘い関係ではない。

キスはするけど、恋人じゃない。

だって、俺は先生からはっきりと拒絶されるのが怖くて、そういう話題は避けていたから。

先生と過ごすのが大事だったから。

でもそれが壊れようとしている。

「もう、あなたには友達がいるでしょう？ 私はあなたの孤独をどうにかした。もう、いいでしょう？」

「嫌だ！ 俺は先生のことを……」

またしても俺は最後まで言葉が紡げなかった。

先生は俺のネクタイを強引に引つ張り、キスして止めたからだ。

「私はね、ただ遊んでたのよ。アンタで。さみしがりの年下なんて甘くすればホイホイついてくる。本当、楽しかったわ」

「先生……」

ウソ、つかないください。

だったらどうして、そんなに泣きそうな顔で言っんですか。

どうして、そんなに声が震えているんですか。

どうして、こんなに優しいキスをしておいてそんなことを言っんですか。

「先生、本音言つてよ。頼むから。俺、先生がいなくなるなんて嫌だよ」

「だから、言ってるでしょう？ 私は……」

「ウソだ！ 先生、ならどうして先生は泣いてるんだよ!？」

先生は泣いていた。

いつも笑いかけてくれた綺麗な顔を悲しみでゆがめていた。

俺はこんな先生の顔を見たくない。

笑っていてほしい。

「ウソ、つくのやめようよ？ ホントはどうしたいんだよ、佳保」

俺は初めて先生の下の名前で呼んだ。そして、優しく先生を抱きしめる。絶対に離したくない、そう強く願いながら。

「好きよ。好きよ！ 好きなのよ！ 恭也のことが。ずっと、ずっとよ？ どうして気付いてくれないの？ 好きなら私をもっとしばらくりつけないよ！ もっと、私だけを考えなさいよ！」

先生は、いや、佳保は俺に思い切り抱きついてきた。

佳保は今にも壊れそうなくらい、もろくて、柔らかかった。いつか、佳保に抱きしめられて救われたように、優しく。

今度は俺が佳保を救うんだ。

お互いに落ち着いてから、佳保は話してくれた。

佳保は俺が中学生のころ、教育実習で俺の中学校に来ていたこと。そこで、今現在のように上手いはず失敗ばかりだったこと。そんな自信を無くしかけていたときに俺と出会ったらしい。

そして、俺は失敗を繰り返す彼女にこう言ったそうだ。

「先生、もっと笑ってよ。先生、綺麗なんだからさ」

そこで、佳保は気付いたらしい。

保健室の先生は生徒を不安にしてはいけない。

生徒を優しく包まなくてはいけないのだ、と。

きっと、自分は笑えないのを指摘されるぐらい余裕がなかったのだろう、と。

そして、俺をよく見てくれている子だなあ、と感じたらしい。

「それからなんだ。実習期間は、ずっと君を目で追いかけてね。ほんと、何年ぶりだろうね？ 気になる男の子を目で追いかけるなんて」

佳保は保健室のベッドに腰をかけて照れ交じりに笑った。

「それで？」

「この学校で採用されて、しばらくしてから君が入学してきた。嬉しかったんだ。君がやってくるって知った時は」

佳保は隣に座っている俺の手を握った。

「でもね、探しても君はいなくて。ようやくと見つけた時の君は、あの時の目をしてなかった。ものすごく虚ろな目。きっと、実習の時の私はあんな目をしていたんだろうな、って。見てて悲しくなっちゃった」

「そんなひどかったんだ」

俺は苦笑した。

「ひどかったよ。それでね、恭也の本音が聞けた時に、恭也には私が必要だな、って思った。私があの時、恭也に助けられたように、私が恭也を助けなくちゃって」

佳保を引き寄せて俺は言った。

「ありがとう、佳保のおかげで俺は救われた」

「うん。それでね、恭也がここに来てくれるようになってからは本当に楽しくて、どんどん恭也に惹かれていったんだ。恭也が嫉妬してくれたこともあったでしょ？ あの時には本当にうれしかった」

「ねえ、佳保」

「何？」

俺は佳保を抱きしめたまま聞いた。

「なんで、やめるの？」

「お父さんがね、倒れちゃったから。私、一人娘だから。実家に帰ろうと思って」

「そう、なんだ」

俺にはどうしようもできない問題だった。

何の力もない俺にはどうしようもなかった。

でも、俺は佳保に言うことにした。

「俺、佳保と離れたくないから、頑張る。佳保の地元の大学受ける。だから、俺、佳保と恋人になりたい」

佳保は俺の背中をポンポンと叩いた。

「嬉しいけど、地元の大学レベル高いよ？」

「努力する」

「それに、私、七つも上じゃん」

「年上、いや、佳保以外考えられないから」

「……浮気しない？」

「するかよっ！」

「それじゃあ、恋人になってあげる」

佳保は泣きながら笑っていた。

何だろう、どうしようもなく愛おしい。

俺は佳保の頬を触った。

すべすべしてとても気持ちよかった。

「佳保」

「うん」

俺は自分から佳保にキスをした。

たぶん、これが俺の新しい始まり、だと思う。

**（後書き）**

感想、ご指摘、意見を頂けると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5034t/>

---

愛し愛され、救われて。

2011年5月23日18時55分発行